

平成二〇年度 中学校第一回入学検査問題 (国語)

(その一)

注意 解答はすべて解答用紙に記入すること。また、字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

小学校五年生の和也は、郊外の小さな町から市内に引っ越してきた。そこで、近所に住む同級生二人(エキヒロとナオミ)と仲良くなる。ところが、彼らは学校では周囲から浮き上がっており、その原因が彼らの住む地域にあることを知る。新聞委員になった和也は、その地域についての記事を書き上げるが、先生の指示で載せられなくなってしまふ。先生のやり方に納得できない和也たちは、新聞記事をもとに作ったビラを父の経営する塾の印刷機で大量に刷りあげた。

「おはよう、けさは早いな」

母がお茶を注いだ湯のみ茶碗に手をのぼしながら、こちらに目を向けてきた父に、おはよう、を返し、食べ終わった食器を台所に運ぼうとしたところで、

「実はな、おとといの土曜日、おまえの担任の先生から塾に電話があった」と声をかけられ、どきりとして、浮かしかけていた腰を戻した。

「先生はなんて……」

1 冷や汗が噴き出すような気分に襲われて尋ねると、

「新聞がどうとか言ってたな」

「それで？」

「それでって、なにかまずいことでもあるのか？」

そう問い返された私は、先生はどこまで父に話をしたのだろう、と案じながら、

「別にないけど」と答えた。

「ならいい」

2 あつさりうなずかれて拍子抜けする。こうなると、かえって気になる。が、父はそれ以上なにも言うつもりはないらしく、テーブルに載っていた新聞を広げて、湯のみを片手に記事を読みはじめた。

「ごちそうさま」

重ねた食器を台所に運んでから時刻を確かめ、ランドセルを背負って玄関へと向かうあいだも、父は新聞の文字を追っている視線を上げない。

とにかく、早いところ家を出ちやおうと焦りながら、

「行ってきます」

玄関を出ようとしたところで、

「和也」と、背中に声がかかった。

「なに？」

3 振り返った私をしばらく見つめていた父が、「あまり無茶はしないようにな」とだけ言い、再び新聞に目を戻す。

逃げるようにして玄関を飛び出した私は、もしかしたら父にばれちゃったのかもしれない、と不安になった。

(中略)

最初は給食が終わってから三人で屋上にのぼり、という単純なものだったけれど、母の校内放送を乗っ取る、となるとそうはいかない。で、いろいろ作戦を練り、こうして私が仮病を使って、四時間目のうちに、エキヒロの合鍵で屋上へと侵入することになった。放送委員のエキヒロと行動を共にするのは、ちよつと残念だけどナオミ。図書委員会からのお知らせを直接放送する、という口実を使えば、問題なく放送室に入ることができるし、バリケードを作るのもふたりでやれば早く終わる。ここまで用意周到に準備をしておき、通常の放送のあと、給食が終わりかけるタイミングで本番の放送をスタートさせ、屋上で待機していた私がビラを撒きはじめる、という段取りだ。ナオミが放送室に回ったのは、ふたり同時に早退を申し出るのでは不自然だったのと、ナオミ自身が、4 どうせなら自分の声でビラの内容をみんなに訴えたい、と言い出したからだ。

すべてが順調に運び、図工の先生に断ってから、私は五年二組の教室をあとにした。

ズボンのポケットのなかの合鍵を握り締め、5 すしりとくるランドセルの重さを噛みしめながら、はやる気持ちを抑えて西階段へと向かう。

廊下の手洗い場を通りすぎようとしたときだった。

「おい、待てよっ」

低く、しかし鋭い声が、私の首すじに突き刺さった。

ぎくりとして振り向くと、ノリオが怖い目をして立っていた。ノリオだけでなく、ススムとタカシもそこにはいた。

なんで？ とうろたえた私は、彼らが水彩で使うプラスチックのバケツを手に入れているのを見て、状況を理解した。汚れた水の取り替えを口実に、教室を抜け出て来たに違いない。

「**A**」を貸せて言ったの、忘れたのかよ」

ススムが言い、答える暇もなく手洗い場の向かい側のトイレに連れ込まれる。

ノリオの手が伸びてきてむなぐらをつかまれ、そのまま壁に押し付けられた。

「仮病を使って逃げようって魂胆だろ？」

「そんなわけじゃ……」

というより、朝、ススムに言われたことを忘れていただけなのだが、<sup>6</sup>ノリオたちはすっかり勘違いしたみたいだ。仮病、という部分だけは当たっていたけれど。

「この腰抜け野郎」

殴られる、と思ったのだけれど、私の顔に唾を吐きつけたノリオは、つかむ部分をむなぐらから髪の毛に移すと、私をトイレの奥へと引きずった。と思いきや、アンモニア臭い小用の便器のなか、ひやりと冷たい磁器の肌に、私の顔をぐりぐりと押し付けはじめた。だけでなく、身動きができない私の尻や太ももの裏側を、ススムとタカシが交互に蹴りつけてくる。

固くて臭い便器に顔面を押し付けられたまま、奥歯を食いしばり、受ける痛みと、それを上回る屈辱に、必死になって耐え続ける。悲鳴を上げて、誰かに駆けつけてこられてはならなかった。どんなことをされても、ランドセルのなかのピラと私たちの計画を守る必要があった。

昼の校内放送がはじまるころ、私はひとりで屋上にいた。誰にも見とがめられずに屋上への侵入を果たせた。ランドセルのなかのピラも無事だった。

ノリオたちにしても、さすがに授業中とあっては、あまりしつこくいたぶることはできなかったみたいで、ほんの一、二分くらいで私を解放し、口々に捨て台詞を吐いて教室へと戻っていった。

時間は短かったけれども、あれだけ屈辱的な仕打ちをされ、前の私だったら泣いていたかもしれない。というより、絶対に泣いていた、と思う。しかし、声を上げることも、涙をこぼすこともせずに耐え抜いた自分に、<sup>7</sup>いまは誇らしさを感じていた。

あとは、ユキヒロとナオミが首尾よく放送室の占拠を果たし、屋上にも放送が聞こえてくるのを待つだけだ。

O町の家並みが見える屋上で見上げる空はさすがしく晴れ、綿菓子みたいな白い雲を背景に、トンビが二羽、ゆつたりと旋回している。どこからか、まだ歌が下手くそなウケイスの声が聞こえてくる。

こんなふうにはひとりで屋上にいると、これからはじまるのが嘘みたいに、<sup>8</sup>長閑で平和な気分になる。

そろそろかなあ、と思いながら待っていると、ユキヒロが校舎の外のスピーカーにもスイッチを入れたらしく、突然、校庭に音楽が流れ出した。

音楽は、通常の校内放送が終わるときのものとは違っていた。大音量で流れだした曲は、ローリング・ストーンズの「黒くぬれ！」だった。

きのうの作戦会議の最後で「開始の合図に、思いっきり洒落た曲を流してやるからよ」と息巻いていたユキヒロが、安子ねえから借りてきたレコードだ。グループサウンズでさえ不良の音楽、みたくに見られていた時代にローリング・ストーンズだなんて、ユキヒロは、というより、安子ねえの音楽の趣味は、かなり過激だったように思う。

屋上から望める平和な景色には完全にちくはぐなりズムとメロディ、そして、ホーカルだけれども、私の背すじといわず、全身の**B**が栗立つた。これまで、ローリング・ストーンズのことはいくらも知らなかったし、歌詞の内容はまったくわからないけれど、これから起こることに、<sup>8</sup>これ以上に相応しい曲はないような気がする。

たぶん、これだけで職員室や教室はざわめきだしたに違いないのだが、しだいに演奏がフェイドアウトし、

「みなさん、きょうの放送はここからが本番です。大事なお知らせがありますので、聞き逃さないようにお願いします」ユキヒロのアナウンスが被り、続いて、スピーカーからナオミの声が聞こえ出した。

「わたしは五年二組のキリユウナオミです。みなさんや、みなさんのお父さんやお母さんが、エタ町の子、と言って陰でう

わさしている本人です。きょうの放送担当のオオトモユキヒロくんも、わたしと同じです。わたしたちはいま、日小の放送室を占拠しています。つまり、学校の放送室を乗っ取って、日小のみなさんと、それから、町の人たちに放送をお届けしています。この放送を聞いているみなさんは、ほんとうの差別のことを知っていますか？ これからそのことについて、話をしたいと思います——」

ピラの内容をしゃべりはじめたナオミの声を聞きながら、<sup>9</sup> ついにやつた！ という興奮とともに、胸に痛みを感じていた。こうして、ナオミが自らの声で訴えているという事実には、なんだか涙が出そうになる。

ナオミやユキヒロに負けずに、こつちもうまくやり遂げなくちゃ、とわれに返った私は、屋上のフェンスを乗り越え、校舎の中央、時計が掛かっているあたりに移動して、ランドセルを足下におろした。

取り出したピラの束を手にも、最後の合図を待った。

おそらくいまごろは、血相を変えた先生たちが、放送室へ突入しようと必死になっているに違いない。

やがて、ナオミにかわってユキヒロがマイクを持った。

「えー、みなさん。放送だけではすぐに消えてなくなってしまうので、これから、いまの内容が書いてあるピラを撒きます。みなさん、校庭に出て、屋上から降ってくるピラを拾ってください。そして、ピラを持ち帰って家の人と一緒に読んでください。お願いします」

そういい終えてから、思い切り調子を変えた陽気な声で、

「いざー、カズヤ！ いっちよう派手にばら撒いてやれ！」私に向かって言ってきた。

それっ、とばかりに、手にしていたピラを大空に向かって放り投げる。

そよ風に乗ったピラが、散っていく桜の花びらみたいに舞いはじめる。

最初のピラが地面に落ちる前に、先生たちが校舎のなかから飛び出してきた、空を見上げた。

ランドセルから取り出したピラをせっせと撒いている私に気づいた先生が、こちらを指差して怒鳴りはじめる。が、なにを言っているのかはわからない。まだ放送室でもちこたえているらしいユキヒロが、同じローリング・ストーンズの、今度は「ジャンピン・ジャック・フラッシュ」を、さつき以上の大音量で流しはじめたからだ。

ほどなく、給食中だった各クラスの子どもたちが、ばらばらと校庭に姿を見せはじめた。懸命になって先生たちが教室に戻そうとするのだが、あつという間にその数は膨れ上がり、私が撒いているピラを、歓声を上げながら先を争うようにして追いかけている。

ランドセルの中身が空になる前に、私の背後、屋上への扉の内側に人影がちらつきだした。先生たちが、ドアを引っ張ったり押ししたり、あるいは叩いたりしているみたいだ。鍵はかけてあるけれど、誰かが鍵を持つてくれれば、すぐに開けられるに違いない。

残りのピラを両手でつかんだ私は、校庭を見て驚いた。先生や子どもたちだけでなく、放送を聞いたらしい近所の人たちが、続々と日小のグラウンドに集まり、ピラを拾いはじめていた。

苦勞して二千枚のピラを用意したかいがあつたと嬉しくなる。

最後のひとつかみのピラを空に放り上げ、視線を下に戻したところで、再びびっくりした。

野次馬で集まってきた大人たちのなかに、私の父の姿があつた。腰をかがめた父が、落ちてきたピラを拾い上げて眺めている。

やつぱりばれていたのだろうか……。

まあでも、やるべきことはやつたし、どつちみち、あとで叱られるのは決まっていたようなものだったし……。

そう考えていると、まったく思いがけないことを、私の父はした。

ピラをポケットに収めた父は、<sup>10</sup> 自分の頭の上に両手を持っていき、大きな丸を作って私に笑いかけてきた。

うそっ！

でも、見間違ひではなかつた。

しばらく丸を作っていた父は、その手で私にバイバイをし、あとは知らないよ、みたいに **C** をすくめてみせると、校庭の外へと向かってすたすた歩き出した。

啞然として、遠ざかっていく父の後ろ姿を見つめていたところで、背後から、「こらー！」という怒鳴り声が飛んできた。

屋上のドアが開いていた。

すぐさま、男の先生たちが、なにをしてるんだつ、だとか、やめなさいつ、だとか、危ないぞつ、だとか、とにかくすごい形相をして私に迫ってくる。

けれど、<sup>11</sup>そんな先生たちを目にしても、全然怖くなかった。

そしてたぶん、先生たちがひとつも怖くないのは、いまごろはバリケードの撤去をはじめているはずの、ナオミとユキヒロも同じだろう。  
(熊谷達也「七夕しくれ」)

問一  A  C に入る適当なことばを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは二度使わないこと。)

ア 胸 イ ひふ ウ 手 エ 毛 オ 顔 カ まゆ キ 肩

問二 — 線部 1 「冷や汗が噴き出すような気分に襲われて」とあるが、この時の和也の気持ちを説明したものととして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分を叱るのではなく父親に告げ口をした担任の先生のひきょうなやり方に対して、思わずかつとなり、怒りにうちふるえている。

イ 担任の先生だけでなく父親にまで自分たちの計画がばれてしまったのだと思い、もうだめだがつくり落ちこんでしまっている。

ウ 父親に自分たちの計画が知られてしまったと思い、この後どんなに手きびしく叱られるかと考えると恐ろしくてたまらなくなっている。

エ 父親に思ってもみなかったことを言われ、あわてふためくと同時に、自分たちの計画がだめになるのではないかと気がなくなっている。

問三 — 線部 2 「あつさりうなずかれて拍子抜けする」とあるが、それはどういうことをあらわしているのか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父にさらに追及されるのではないかと心の内で身構えたが、その気持ちの張りがぬけた。

イ 父があつさり自分のことばを信じてしまったので、だましがいがなくてがっかりした。

ウ 自分がこれから行おうとしていることを父が認めてくれたので、ほっと気持ちがゆるんだ。

エ 先生が父にどこまで話し、父はどう考えたのか確かめられると思っただが、あてがはずれた。

問四 — 線部 3 「あまり無茶はしないようにな」とあるが、父親はどんなつもりでこのように言ったと考えられるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 和也たちが先生に反抗していることを知り、自分の若いころを思い出して共感し、理解を示そうとしている。

イ 和也たちがやろうとしていることに気づき、それを認めながらも、やりすぎないように忠告している。

ウ 和也たちが学校で何をやったとしても、自分には関係ないのだと、無関心な態度をあらわにしている。

エ 和也たちが計画していることを知っており、担任の先生に頼まれて、その計画の中止をはっきり求めている。

問五 — 線部 4 「どうせなら自分の声でピラの内容をみんなに訴えたい」とあるが、ナオミはどうしてそうしようと思ったのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分自身がかかわる切実な問題なので、自分の言葉で直接みんなに語りかけたいと思ったから。

イ 他の二人に任せるよりも、話すのが得意な自分が訴えた方が、相手に伝わりやすいと思ったから。

ウ 図書委員会からのお知らせを放送するついでに、ピラの内容を訴える方が無理がないと思ったから。

エ 差別を実際に経験していない和也に、軽々しく差別を語ってもらいたくはないと思ったから。

問六 — 線部 5 「ずしりとくるランドセルの重さを噛みしめながら」とあるが、この時の和也の気持ちを説明したものととして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちの計画をいざ実行する段になると弱気になってしまい、ナオミとユキヒロの信頼を重荷に感じている。

イ 自分がやろうとしていることの結果を考えると、この後自分がどうなってしまうか不安で気が重くなっている。

ウ 自分がやろうとしていることの重大さや、この計画で自分が果たさなければならない責任の重さを感じている。

エ 自分がここまでやつてきたことの成果を背負っていると思うと、その重さが大きな達成感となって感じられる。

問七 — 線部 6 「フリオたちはすっかり勘違いしたみたいだ」とあるが、和也の行動をフリオたちはどのように「勘違い」したのか。解答らん空らん A・B に、それぞれ一〇字以内の語句を入れ、答えとなるようにしなさい。

問八 — 線部 7 「いまは誇らしさを感じていた」とあるが、和也は自分のどういう点に「誇らしさ」を感じているのか。二点にわけて、それぞれ三〇字以上、四〇字以内で答えなさい。

問九 — 線部8 「これ以上に相應しい曲はないような気がする」とあるが、どうしてそんな気がしたのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 当時としてはかなり過激な音楽が、これから自分たちがやろうとしていることの過激さにびつたりだと感じたから。
- イ 大音量で流れ出した外国の音楽が、生徒たちのざわめきを抑えて放送に注意を引きつけるのに最適だと思ったから。
- ウ 平和な風景に合わないリズムやメロディなどが、平和な学校生活をこわそうという自分の思いに合っていたから。
- エ 心おどらせる軽快なリズムやメロディなどが、大きなことを始める前の景気づけにふさわしく感じられたから。

問十 — 線部9 「ついにやった！ という興奮とともに、胸に痛みを感じていた」とあるが、この時の和也の気持ちを説明したものとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちに暴力をふるってきたノリオたちを見返すことができた満足感を感じるとともに、自分やナオミが受けてきた仕打ちを思い出し、そのつらさが胸の中でよみがえっている。
- イ 自分たちの力で計画通り放送を始めることができたという喜びを感じるとともに、差別を受けているナオミ本人がっらい差別のことを語っていることにつらく切ないものを感じている。
- ウ かくし通してきた計画がようやく実現できたことで、これまでの緊張や息苦しさから解放されるとともに、これから自分たちがどうなっていくのかという不安に恐れおののいている。
- エ 自分たちの計画を実行できたことによりうれしきを感じるとともに、差別について訴える放送をナオミ一人に押しつけてしまった無責任さに気づき、そのことをはずかしく思っている。

問十一 — 線部10 「自分の頭の上に両手を持っていき、大きな丸を作って私に笑いかけてきた」とあるが、父親はどういう気持ちでこのようなことをしたと思われるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身派手なことが大好きなので、息子たちが学校全体を巻き込んで騒動を起こしたのを見て、「いいぞ、もつとやれ」と楽しくて仕方なくなっている。
- イ 息子の陰の協力者として、近所の大人たちを学校まで先導してくることに成功し、「どうだ、うまくやっただろう」と得意になっている。
- ウ 差別という重大な問題を訴えるには、多少過激な方法でなくてはならないと自分も思っていたため、「よくそれに気がついた」と息子に感心している。
- エ やり方には多少問題があるにせよ、自分の息子が今していることは決して間違っていないと判断し、「よくがんばった」と息子たちの行動を認めている。

問十二 — 線部11 「そんな先生たちを目にしても、全然怖くなかった」とあるが、それはどうしてか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と自分の友達のために正しいことをしたのだという確信があり、やるべきことを精一杯の形で成し遂げた充実感でいっぱいだったから。
- イ 自分にとっては先生たちよりはるかに怖い存在である父親に、どうやら叱られずに済みそうだとわかったので、ひとく気が楽になったから。
- ウ 自分たちで進めてきた計画を見事成し遂げたナオミやユキヒロと一緒にならば、この先何もおそれる必要などないと少し思い上がっていたから。
- エ 自分たちの訴えが確実に伝わったという手ごたえに気持ちが高ぶり、自分たちがとんでもないことをしたという実感がまだわいていないから。

問十三 ユキヒロやナオミが、この放送やヒラで訴えたかったことはどういうことだと思われるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちの現状を多くの人に知ってもらい、差別をしている人たちが罰せられるように追い込もうということ。
- イ 大人がいくら力で押さえつけようとしても、自分たちは決してあきらめずに自分たちの意志を通すのだということ。
- ウ ノリオたちの暴力に放送やヒラという暴力以外の手段で対抗することで、ノリオたちが過ちに気づいてくれること。
- エ 生徒や町の人たちにうわさや先入観でなく本当のことを知ってもらい、差別について考えてもらいたいということ。

## 二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「わたしのいのち」という言い方を人はよくする。この言い回しの意味するところはなかなかむずかしい。「わたしのいのち」というからには、わたしの服、わたしのかばん、わたしの鉛筆といったふうに、自分の持ち物、つまりは自分の所有物を考えるかもしれない。けれども、服やかばんや鉛筆のように、いのちはだれかのそれと取り換えることができない。なくしたらまた別のいのちを買うというようなことはできない。とすれば、いのちはそれがないとわたしが生きていけないものと言いかえられるだろうか。つまり、わたしに不可欠のもの、つまりわたしにとっていはん重要な事物もしくは対象だと言えるだろうか。これもまだ不正確だ。なぜなら、「いのち」は「わたし」と別物ではないからである。「わたしのいのち」という言葉を口にしてこのわたしそのものが、いのちの一つの現実であるからだ。その意味では、「わたしのいのち」とは生きているこのわたしの存在そのものことだと言いたくなる。けれども、そのいのちについて、わたしはほとんど知るところがない。からだの内部がどうなっているかを知らないし、いつ病気になるか、いつこの生が終わるのかも自分では分からない。いのちをヤシナうということ、つまり食べるということも、勝手に食欲が生まれるのであって、わたしがコントロールしているわけではない。ねむりたいと思ってもすぐにねむれるわけではないし、また「わたし」がねむっている間もわたしのなかでいのちは騒がしくいらいにざわざわと活動している。いのちはその意味でわたしそのものであるには違いないが、わたしが理解しきれるものではないし、またわたしの思いどおりになるものでもない。いのちは、だから、自分がそれでありながら、自分ではどうしようもソウサできないものというくらいにしか、まずは言いようのないものだ。が、それがなくてはわたしがいないということ、このことは確実だ。

だから人は、このいのちはわたしのものだとはつきり主張する。そう主張してゆずらない。このいのちを攻撃されたり、ないがしろにされたりするのは、わたしが攻撃され、ないがしろにされることに等しいからである。このいのちをどのように取りあつかうかについては、それはわたし自身のことなだから、当然、わたしが決める。これがわたしたちの自由というものである。個人が自由であるとは、個人がその存在、その行動のあり方をみずからの意志で決定できる状態にあるということだ。わたしの身体もわたしのいのちもはかならぬこのわたしのものであって、この身体を本人の同意なしに他から傷つけられたり、その活動を強制されたりすることがあってはならないというのは、「基本的人権」という理念の核にある考え方であると言ってよい。

けれども、だからといって、いのちはそういう意味でわたしの所有物であるのではない。所有物とは、わたしが意のままにできるもの、自分でその処分を決められるものことだ。つまり「わたしの物だからわたしがどうしようと勝手にしよう」という理屈である。自殺の正当化にあたっては、<sup>a</sup>献体のトウロクや臓器の提供にあたっては、その背景にあるのは同じ論理である。生きて死ぬのはほかならぬこの自分であるから死に方は当人が決めることができる、自分の身体は自分のものだからそれをどう処分しようと（美容整形しようと、体内の臓器を他人に譲渡しようと）他人にとやかく言われるスジアはないというわけだ。

が、ここでちょっと立ちどまって考えておかねばならないことがある。自分の自由がかかっているその同じ身体、同じいのちが<sup>3</sup>けつして自分だけのものでないことも、わたしたちは日々痛いほど感じているからだ。人は自分のいのちを自分で創りだしたわけではないし、自分のいのちを自分で閉じることもできない。だれも自分でへその緒を切ることはできないし、自分で棺桶の中に入ることもできない。だれしも他人の庇護のもとで育つ。他人にあれやこれやの世話を受けながら老いる。身体やいのちを、さらに広く「身」とか「身柄」というふうにとれば、家族生活を営む人、いろいろな団体の運営責任を負う公的な立場にいる人にとっては、自分の身体を自分だけのものだと感じることのほうがむしろまれだろう。

いのちは自分だけのものではないということ、このことは、食や性、育児や介護の場面一つ一つでもすぐに分かる。いのちはいつも、他の身体との交わりややりとりのなかにあるのであって、いのちの保ち方、いのちの行く末は、そのいのちにさまざまな人たちであずかっている人のものであるのだ。だれかが死ぬということは、その人のいのちだけに起こる出来事なのではない。その人に死なれた人びとにとってもそれは重大な出来事なのだ。だから、何十年も前に戦死した人の身柄を、あるいはその人が身につけていた物を、人はいくらかときがたつてもどうしてもこの眼で確認したいと、かつての戦地に赴く。個人のその身体が死体となったとき、そのいのちをともに生きた者がそのいのちを亡きものとして認める、そういう行為をもつてやと一つのいのちは絶える。<sup>5</sup>「死とともに死者が誕生する」と言った人がいるが、その意味もそういうところにある。

<sup>6</sup>いのちのもつとも基礎的な場面で、人はたがいのいのちを深く交えている。この交感がいちのちのながを流れている。からだはだれのものか、いのちはだれのものか。これは、人がだれと生きてきたか、だれとともに生きつつあるかという問いとともに問われねばならない問題なのである。かつて生物学において、生命活動、とくに「<sup>e</sup>コキユウ」が燃焼の比喩で語りだされたように、生命というと、生きものの内部にあつて何か実体のように存在するものと考えられがちである。まるで生命の炎

とでもいうべきものがあって、それがいつかふつと消えるかのように、である。しかし、生活といえは他人と共同のものである。他人との交換や交感という関係からはなれて、人の暮らしというものは成り立たない。脇の下やあごの下を洗われ、こぼした乳やもらした便を始末してもらった経験——これを「存在の世話」とよんでもよい——、あるいは介護や看護で他人にからだをさすってもらったこと、恋人と指先をからませること、性の交感、そしていのちの誕生には母親のすさまじいうめき声や、赤ちゃんの嘔きたすような泣き声がともなうこと……。いのちのもっとも基礎的な場面で人はたがいのいのちを深く交えている。この交感がいのちのなかを流れている。ありふれた言い方になるが、〈生〉も〈死〉もその根っこからして社会的な出来事なのである。

(鷲田清一「いのちへの問い」)

㊦ 献体：医学のために自らの遺体を提供すること。 庇護：かばうように守ること。

問一 ——線部 a ー e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1 「わたしのいのち」とは、結局どういうものだと言えるのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたしのいのち」と言うからには、わたしの眼、わたしのかばんというような自分の持ち物とまったく同じとは言えないものの、自分の意のままにできるという点では所有物と同様のものである。
- イ 「わたしの」と言うとき自分の持ち物のようではあるけれど、「いのち」は物と違って複雑なので、その内部構造がどうなっているか、どうコントロールするかなど簡単には理解できないものである。
- ウ 「わたしの」と言うからには自分の所有物のようなのに、「だれかの」と交換したり、別の物に買い換えたりできず、それがないと生きていけない、わたしの存在そのものでもいうべきものである。
- エ 「わたしのいのち」と言うとき、持ち主の意志にしたがってその通りに活動するように思うけれど、その人がねむっている間だけは、本人の意志とは関係のないところで活動し続けるものである。

問三 ——線部 2 「同じ論理」とあるが、それはどういう論理か。解答らん初めと終わりに合うように二五字以上、三〇字以内で答えなさい。

問四 ——線部 3 「けっして自分だけのものでない」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生まれてから死ぬまで、自分ではできないことや、他人の力を借りていることばかりなので、他とのかかわりなしには、自分のいのちや身体はあり得ないということ。
- イ いつ死ぬのかは自分ではわからないし、いのちや身体をやしなうための食欲も勝手に生まれてくるので、自分の意志で生きることを決定しているとは言えないということ。
- ウ 自分のいのちは、自分自身で創り出したものではなく、遠い祖先から受けつぎ、未来に向かって伝えていかなければならない人類の共有物であるということ。
- エ 自らの臓器を提供することによって、自分が死んでも、自分の一部が他人の身体に移って生き続けるように、いのちはリレーされる可能性があるということ。

問五 ——線部 4 「いくらか時間がたつてもどうしてもこの眼で確認したい」とあるが、それはどうしてか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いのちは失われたとしても、ともに生きた人びとが確認することでその人たちの中で生き続けられるから。
- イ 人の死はその人のいのちにだけに起こるのではなく、そのいのちにかかわる人にとっても他人事ではないから。
- ウ 自分と深くかかわった親しい人を亡くした悲しみは、しばらくすると必ずよみがえってくるものだから。
- エ 人の死というのは重大な出来事であるから、どこでどのように死んだのかを確認しなければならないから。

問六 ——線部 5 「死とともに死者が誕生する」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア だれかのいのちが失われるということは、その身体が死体となることで生きている人と区別され、死者として認められるということ。
- イ ある人のいのちをともに生きた人がその死を認めることで、その人たちとのかかわりの中で、初めて死体から死者になるということ。
- ウ 人の死は自分自身では確認できないので、第三者がその人のいのちが失われたことを認めることで、その人は死者になるということ。
- エ きまじまな思いを残して死ぬ人もいるので、その思いをまだ生きている人が受け止めることで、死んだ人は死を受け入れられるということ。

問七 — 線部 6 「いのちのもつとも基礎的な場面で、人はたがいのいのちを深く交えている」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人は根本的に社会的な生きものなので、一人ひとり別々に生きようとするよりも、たがいに協力し合って生きていく方が、よりよい生を営むことができるようになるものであるということ。
- イ 人は一人では生きていけず、その人の内部にある生命の炎を燃やしなが、さまざまな人とその炎を交えてより大きなものにするこ、生きていく強さを手に入れることができるということ。
- ウ いのちはその人の中だけに独立して存在しているものではなく、人は、他の人とともに生活していく中で、他のいのちともかかわり、たがいにやりとりをしながら生きているのだということ。
- エ いのちは他人から傷つけられてはならない個人のものであるが、人は、一人では生まれてくることはできず、人と人がそれぞれのいのちを交えるこ、この世に生まれてくるということ。